

県いちご連品評会 受賞者決定

農産総合課が事務局を務める神奈川県いちご組合連合会は、12月11・12日に神奈川県いちご品評会立毛の部、1月16日に果実の部を開催した。当品評会は、いちご栽培技術の向上、品質の改善ならびに生産意欲の高揚、いちごの振興に資することを目的としている。

立毛の部は県内10支部より95品(支部予選会含む)が出品された。収量や栽培管理技術、生育状態などを厳正に審査した結果、海老名市の澤地正典さんが最高賞である農林水産大臣賞に選ばれ、ほか8人が特選に選ばれた。

果実の部は平塚市役所にて開催され、県内9支部より17品種・134点が出品された。大きさや色、艶、姿形の揃い方、詰め方など、品種特性を考慮した上で審査した結果、伊勢原市の高部光男さんが最高賞である神奈川県知事賞に選ばれた。ほか18点が特選に選ばれ、20点が入選した。今回は「さちのか」の出品が多くみられ、神奈川県知事賞に選ばれた高部光男さんの出品もその一つだった。

審査員を務めた県営



立毛の部園場審査の様子

農技術センター宮川健太郎野菜課長は「定植の遅れが影響して、出品数が例年と比べて多少減少したが、色形や艶が良く、粒の揃ったイチゴが多く出品されており、生産者の努力や技術の高さを感じた」と講評した。神奈川県いちご組合連合会の杉山圭一会長は「今年は夏の猛暑が影響し、定植が遅れた。それに伴い、例年より出荷も遅れたが、出荷量や品質は例年通りだった。いちごは暑さに弱く、影響を受けやすい。今後、暑さに対して今以上に工夫や対策が必要だと感じる」と述べた。

■立毛の部

	氏名	支部名	品種
農林水産大臣賞	澤地 正典	海老名	とちおとめ
神奈川県知事賞	片野 和彦	秦野	章姫
農林水産省農産局長賞	清田 正	厚木	紅ほっぺ

■果実の部

	氏名	支部名	品種
神奈川県知事賞	高部 光男	伊勢原	さちのか
農林水産省生産局長賞	武井 哲也	海老名	とちおとめ



果実の部に審査の様子

学生考案メニューで「三浦半島産」の魅力発信 昭和女子大学産学連携プロジェクト

昭和女子大学の学生が考案した三浦半島産大根・早春キャベツを使ったメニューが1月25日、都築阪急内の3店舗で限定販売された。

本プロジェクトは三浦市農協、JAよこすか葉山、JA全農かながわ農産販売課と同大学が産学連携して取り組んでおり、栄養士や管理栄養士を志す学生が野菜や農業の知識を深めながらレシピを考案し、三浦半島産



学生考案のメニュー

野菜のPRおよび消費拡大喚起を目指す。

約半年間かけ7人の学生がレシピを考案し、プレゼンテーションされた21作のうち、7作が採用され、各採用店舗の改良を加えて販売に至った。

昨年12月14日には同大学の学生と産地見学も実施した。当日は、三浦市内をバスで見て回りながら、収穫体験を行う圃場へ向かった。バスの中では三浦市農協の職員が講師を務め、三浦市の農業について講義を行った。その後、JAよこすか葉山の農産物直売所「すかなごっそ」の視察を行い、産地見学を終了した。

参加した学生は「三浦大根の収穫がひときわ大変だった。ひとつひとつ手作業で収穫する生産者の大変さを体感することができ、良い経験になった」と感想を話した。



三浦市農協が管理する圃場で収穫体験をする学生の様子

正しい知識で労働災害ゼロへ タイヤ空気充てん等の特別教育講習会開催

11月27日農機・自動車課は、全農田村事務所で、タイヤ空気充てん等の特別教育講習会を開催した。JAと全農かながわの職員20人が受講した。

事業者は、自動車タイヤの空気充てんの業務に従事する労働者に対し、特別教育を行うことが義務付けられている。本講習会は、当該が行った資格取得状況調査の結果、未受講者が多かったことから開催された。

当日は、クボタアグリサービス(株)の講師2人を迎え、学科5時間・実技4時間をかけ、作業に必要な知識や技能を習得した。参加者は「講習を受けて安全への意識が高まった」と話す。

タイヤに空気を充てんする作業は、高圧の空気を取り扱うため危険が伴う。過去には死亡事故も発生している。特別教育を受け、正しく作業を行うことが求められる。

農機・自動車課は「これからも県下JA農機担当者の資格取得状況調査をもとに、受講機会が少ない資格を中心に研修を開催する。引き続き積極的な受講を呼びかけたい」と今後の考えを示した。



タイヤの空気充てんをする参加者

台湾の農業・文化に触れ学ぶ 第21回JA経済事業担当者海外視察研修

JA全農かながわは、1月14日から18日までの5日間、「第21回JA経済事業担当者海外視察研修」を台湾で実施した。本研修会は、県内JAグループ経済事業担当職員・社員の業務目標達成意欲向上と、幅広い視野を持った職員の養成を目的としており、県下JAをはじめ、子会社、関連会社から20人が参加した。

研修にて視察団は、台湾の台北および台中エリアで、現地の農協である宜蘭懸農会への訪問をはじめ、日本産商品を多く扱っているスーパー裕毛屋や、4世代続く米メーカー中興精米などを視察した。また、台湾全農インターナショナル(株)社員による講話などを通じ、台湾での日本産農畜産物ならびにその加工品の需要の高

まりや、台湾の文化や日本との友好的な関係に触れた。

参加者は「台湾では、日本産の農畜産物が、日本の3～5倍の価格で販売されているにもかかわらず、よく売れていることに驚いた。日本産の安全性が高く評価されていることを肌で感じた」と、研修を振り返った。



宜蘭懸農会を訪問した視察団